平成25年9月1日発行

名古屋女子大学

17号

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所長
竹尾　利夫
TAKEO Toshio

2015年、本学園は創立100周年を迎えます。学園訓「親切」を信条に掲げて、こころ優しく、力強く前進する自立した女性の育成を目指した学園の創立者、越原春子先生の精神は、大正から昭和、そして平成へと時代が移り変わっても、揺るぎない基本方針として息づいています。

大学教育は今、大きな変革の時代を迎えています。大学の大衆化に伴う教育と研究の質の確保、キャリア支援、国際化・グローバル化に対する取り組みなど、さまざまな課題が山積しているからです。各大学が試みている改革の基本は、大学教育の質的転換に他なりません。女子教育を目的とする本学園では、豊かな人間性と高度な専門性を兼ね備えた、優秀な人材を求める社会の要請に応えるべく、創立者の基本理念がますます強化されています。

半世紀の伝統をもつ総合科学研究所の事業活動も、社会で活躍できる女性の育成を目指して展開してきました。研究所の根幹をなす機関研究「大学における効果的な授業法の研究」では、「学士力」育成のための教育方法の検討がなされています。この９月には本誌の「講演会のお知らせ」に記したような、学士力の育成をテーマに大学講演会を開催する予定です。

そして、プロジェクト研究では本年度３件の申請を採択しました。「教員養成校における創造的思索の構築のための教育カリキュラムの検討」「初等英語教育教授法についての研究」「保育者養成の為の表現授業における指導方法の研究」です。いずれも教育方法や授業法に関わる研究で、教育・保育の分野で活躍する専門的な知識や技能を備えた職能人育成のための授業実践など、研究が進行中です。その成果が期待されます。

また、名古屋女子大学中学校高等学校では、本年度より学園創立100周年に向けた「名女2015プラン」と称する先進の中高６年間の一貫教育を開始しました。教育目標を「新しい時代を切り拓く、こころ優しく、力強い女性」と掲げています。それに合わせて、研究所の機関研究においても中高一貫教育の学力向上に関する本格的な取り組みを始めました。

さらに、研究所が推進する「開かれた地域貢献事業」も、地域に愛される大学を目指して、名古屋市瑞穂児童館及び瑞穂保健所との交流事業を継続し、好評を博しています。とりわけ本年９月から来年にかけて行われる共催イベントは、いくつもの講座企画を実施いたします。本年度も大学教員と多くの学生有志、そして名古屋女子大学同窓会「春光会」及び研究所の教職員が協力して行う予定です。今後とも本研究所の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年度「開かれた地域貢献事業」報告

名古屋市瑞穂児童館　交流事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館　竹村由希

児童館の移転を機に始まった名古屋女子大学との交流事業も、平成24年で３年目となりました。児童館を利用される皆さんにとっても交流事業はすっかりなじみとなり、１つのイベントが終わるごとに次の予定を聞かれることも多くなりました。

平成24年度は食育相談やクッキング、クリスマスイベントなどを行い、たくさんの学生や先生方にご協力いただきました。

わたしたち児童館職員は、子どもたちに家庭ではできない体験をしてもらいたいと思っています。その中の一つに異年齢の交流があります。家族以外の人と関わるということは、社会性を身に着けるうえで重要なことですが、子どもたちの遊び場は年々減っており、不審者への不安から遊ぶ相手も限られています。児童館では、いかに安全に安心にさまざまな人と関わる場を作ることができるかが課題となっています。

交流事業を通して、子どもたちは多くの経験をします。事業の内容そのものはもちろんですが、大学生と関わることで子どもたちは未来への楽しみや憧れを持つようです。意見を尊重し思いやりを持って接してくれる学生の姿を見て、子どもたちの他者への接し方も変わってきているように感じます。

今後も児童館だけではできないことを体験する場として、この交流事業を続けていきたいと思います。

子育てグループ教室

おいしく食べて野菜と仲良し

クリスマスイベント

平成24年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂保健所　「若がえり教室　キラキラコース」を終えて

名古屋市瑞穂保健所 保健師　永田智子

保健所は、認知症やうつを予防するための教室を「若がえり教室」として実施しています。毎日をいきいき・わくわくと暮らし、認知症を予防する方法を考え、最後まで自分らしい人生を送っていただきたいと考えています。

名古屋女子大学と教室を開催させていただくのも24年度で４回目となりました。平成24年９月～平成25年２月の６日間に60代から80代の男性８名、女性19名の方が参加されました。毎年男性の参加も増えてきています。

先生方は、“昨年度とは一味違う内容を”という無理なお願いを叶えて下さいました。「世界に１枚だけ?! オリジナルＴシャツ作り」「いつでも、誰でもできる簡単料理」「永遠の英語ポップス」「薬膳料理に挑戦！」「ヒノキを使った木工作品」など、保健所だけでは出来ない講座の内容が魅力的で好評でした。また、各講座に学生さんが参加して下さいました。苦手意識のある内容の講座は、学生さんに手ほどきを受けることで楽しく取り組めました。学生さんも、普段関わることのない世代との交流は新鮮だったようで教室は笑顔で溢れていました。

認知症の予防には、アクティブなプログラムをたがいに交流をしながら楽しむことが大切といわれています。また、新しいことにチャレンジすることでワクワクする気持ちを味わうことも効果があるといわれています。今回も、新しい体験を気の合う仲間と挑戦する内容が多く、意欲的に取り組まれていました。「できた！」という達成感や喜びも味わっていただけたかと思います。

教室終了後も教室で仲良くなった友人と外出するなど交流を持つ方や、新たな目標を見つけて挑戦しようとする方が多くいらっしゃり、「学生がいると気分が若返る。」「楽しかった。参加出来てよかった。」など嬉しい感想も頂いています。今後も大学と共催し、ますますこの事業を発展させてさまざまな経験や交流をはかっていきたいです。

オリジナルＴシャツ作り

ヒノキを使って木工作品作り

誰でもできる簡単料理

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」
～遊びの中の学びⅢ～

幼児保育研究グループ

平成23年度からの取り組みである「遊びの中の学び」のまとめとなる今年度は、昨年までの継続した遊びの研究に加え、子どもたちの興味や関心がどこにあるのかを遊びの観察から捉えること、また、遊びの中で経験していることへの探求を深めることからの遊びの理解を考えています。さらに、昨年度課題となった、遊びに参加しない子どもたちの中にもその子なりの学びや主体性があるのではないか、また、それはどういったものかを具体的に検討していくことが遊びの中の学びを理解する上で重要であると考え、「一人ひとりの中にある主体性のあり方と学びについて」をサブテーマとして歩み始めました。第１回幼児保育研究会では抽出児の主体性の捉え方や研究の成果、さらに進め方や方向性についての検討が行われました。今後は、抽出児の遊びへの取り組み方を観察記録し、学期ごとの変化を捉えて検討会を実施し、保育に活かせるよう進めていきたいと考えています。

（文責：森岡とき子）

どろんこ遊び（3歳児）

機関研究

「中高一貫生の学力向上に関する研究」
～思考力を育てる「言語活動」の工夫―大学受験指導と日常の授業との相関性を高める―～

中高一貫校学力向上研究グループ

平成25年度から本校は併設型中高一貫教育校としての認可を受け、学園創立100周年に向けた「名女2015プラン」に本格的に取り組める環境となりました。

新しい学習指導要領で重視されている「言語活動」は、自分の考えをまとめたり、他者に対して分かりやすく伝えたりする「仕掛け」をすべての教科で行うことで、生徒の思考力や学習の主体性・自立心を育てられるというものです。中でも「思考力」は、在籍生徒の３分の１を国公立大学合格に導くことを標榜している「名女2015プラン」において、もっとも育てたい学力であるともいえます。目標達成に向けて「どう教えるか」という視点とともに「何を教えるか」についての研究も必要でしょう。

６月に行った一貫４年生「地理Ｂ」の研究授業を出発点に、夏の研究合宿、秋に実施予定の１年生「数学」の研究授業、また他の中高一貫に関する研修会の英知も得ながら、一貫教育進学校としての基礎をつくっていきたいと考えています。

（文責：大西裕人）

研究授業

機関研究　「高校生の学力向上に関する研究」
～思考力を高める授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

研究授業

高校生の学力向上を目指し、総合科学研究所と連携した研究活動も今年度で7年目を迎えました。私たちが研究に取り組むきっかけは「学力を向上させる」ということから始まっています。学力は一つひとつの課題に対して深く思考しながら向き合うことを重ねることで、向上するものです。そしてその状況をつくり出すために、私たち教員は授業を多角的に捉え、ひとつの授業の中にたくさんの「しかけ」をつくることが大切なのではないかと考えました。多様な角度から生徒たちに迫り、生徒たちの中から自然に湧いてくる「考える」活動を積み重ねることにより、結果的に「思考力」を鍛えることにつながるのだと思います。

２年前より、各教科の特性を考慮しながら「思考力を高める授業のあり方」をテーマに掲げて研究を進めてきました。本年度は、芸術・保健体育・家庭科から１教科と外国語の２教科について全教員参観型の研究授業を公開する予定です。なお、公開授業後は本校教員と大学の先生方による研究協議を行い、高校生の学力向上につながる授業のあり方について考察を深めていきたいと思っております。

（文責：野中知里）

機関研究　「大学における効果的な授業法の研究６」
～『学士力』育成のための教育方法の検討～

大嶽さと子・神崎奈奈・嶋口裕基・白井靖敏・遠山佳治㈹・羽澄直子・原田妙子・幸 順子

『学士力』育成のための教育方法の検討のなかで、平成25年２月に実施した本学教員（常勤・非常勤）対象の調査結果を簡単に紹介します。調査は、中央教育審議会答申に示された学士力として挙げている各項目について、教員それぞれが担当している科目のなかで、「授業を通して意識して実践されているか」などについて聞いたものです。結果、回答を得た講義107科目のなかで、「かなり意識して力を入れている」および「意識して授業をしている」として挙げた上位項目は、「論理的思考力」、「人類の文化, 社会と自然に関する知識の理解」でした。演習78科目では、「コミュニケーションスキル」「自己管理力」、実験・実習科目31科目では、「問題解決力」「自己管理力」となりました。一方、項目のなかで「倫理観」や「市民としての社会的責任」を挙げたのは、どの授業形態でも少ないことも分かりました。この他、学部ごとや、教養科目と専門科目における特徴などについて、また、具体的な授業実践事例についての記述回答などから、今後、分析検討する予定です。

（文責：白井靖敏）

機関研究　「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

氏原陽子㈹・竹尾利夫・遠山佳治・吉田 文

今年度は、過去４期８年間の研究活動を踏まえて、新たな研究メンバーが加わり、第5期を迎えました。そして、本学園の創立者である越原春子先生を視野に入れて研究者個々の専門的な研究分野の視点から女子教育をとらえていく個人研究と、共通する土台に立って春子先生および本学園の女子教育をとらえていく共同研究の２本立てで研究を進めていくことになりました。

その主旨は、2015年に本学園が創立100周年を迎えるにあたって、本学園の創立者である越原春子先生の功績を改めて研究するとともに、本学園が「よき家庭人であり力強き職能人としての女性を育成する」ことを目指して、どのような女子教育を行ってきたのかを研究することにあります。

今年度の活動としては、研究メンバーが各専門領域を踏まえて、個人研究の成果を発表。また、議論をして、共同研究に向けて作業を進め、研究を深めていくことを考えています。（文責：氏原陽子）

プロジェクト研究　「教員養成校における創造的思索の構築のための教育カリキュラムの検討」
～芸術・哲学・心理の観点から～

塩見剛一・堀 祥子㈹・命婦恭子

今年度に入り、研究メンバーのゼミを合同で２回行いました。その活動内容は、造形的活動に語りの要素を加え、学生が自らの言葉を用いて思考を深めることを目的としたものです。

１回目は、あたたかみある造形素材である羊毛フェルトの加工と語りを同時に行い、２回目は、前半は可塑性の高い素材である小麦粉に触れ、後半で語りの活動を行いました。語りのテーマは学生一人一人が付箋に書き出し主体的に決定できるようにしました。テーマに沿って語ることで、自由でありながらも、拡散的で間を嫌うおしゃべりとは異なった、思索へと誘う対話を目指しています。

普段の講義形態ではなく、皆でひとつのテーブルを囲む対面形式ですすめました。緊張する者もいましたが、手元に作業があることによって気持ちの置き所が生まれ、その場に存在することへの違和感が和らぐ効果が見てとれました。活動の様子は動画による記録を行い、今後、学生の行動や語りを質的データとして分析を行う予定です。（文責：堀 祥子）

プロジェクト研究　「初等英語教育教授法についての研究」
～小学校教員の授業力・教育力を活かす小学校英語活動法～

ダグラス・ジャレル㈹・羽澄直子・服部幹雄

本研究を始めるにあたり、まず文部科学省発行の『小学校学習指導要領解説（外国語活動編）』で述べられている、外国語活動の役割と到達目標を確認しました。小学校の外国語活動の目標は単なる言語習得ではなく、異文化理解やコミュニケーション能力育成であり、国語科を始めとする他の教育活動との関連づけが必要であるとされています。また日本語と外国語（英語）の発音やリズムの違いに気づかせることで言葉の面白さや不思議さを体感させることも重要な目的の１つです。

前期は主に児童教育学専攻１年生対象の「英語コミュニケーション１」での授業実践を通して、言葉の面白さを実感できる効果的な指導について考察を進め、小学校で英語を教えるために必要な知見を収集しています。また、文部科学省著作権所有の教材『Hi, friends! 1・2』を分析し、小学校英語の中心である「話す、聞く」の基礎となる活動の具体的な教授法も研究しています。（文責：ダグラス・ジャレル）

プロジェクト研究 「保育者養成の為の表現授業における指導方法の研究」

清道亜都子・松田ほなみ㈹・三輪亜希子

私たちは、短期大学部保育学科の授業のなかで、身体表現、言語表現、絵画表現に携わっています。２年生の後期に開講される総合表現演習授業は、身体表現、絵画表現の分野において、表現する力を養うことを1つの目標とします。そこに言語表現も加え、３つの分野の総合により、学生が充分に創造性を発揮出来るように、試行錯誤していこうと考えています。自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養うことができるように、授業展開において指導方法の研究を行います。昨年、言語表現と絵画表現で協力し、紙芝居制作指導に取り組んでいます。学生たちが、自分でストーリィを考え、イメージを絵にしました。身体表現では紙芝居と同じ題材を使い、ダンスを創作し、発表しています。現在はその活動を研究し、後期の授業に向けて最終計画を組み立てているところです。これまでの研究を踏まえて、学生が「表現することの喜び」を体得できる授業展開を目指したいと考えています。（文責：松田ほなみ）

平成25年度地域貢献事業計画

本研究所が名古屋市瑞穂児童館及び瑞穂保健所と展開しているコラボレーション事業「開かれた地域貢献事業」は5年目を迎えました。毎年、好評価をいただいており、今年度も学内公募で参画を先生方にお願いし、応募していただいた先生の数は今までの最高となり、充実した企画が採択されました。

名古屋市瑞穂児童館との交流事業は、平成25年9月から26年３月までに、児童館祭りのイベントを含めて、7つの講座を開催し、12月7日（土）・8日（日）の児童館クリスマスイベントとして8つの楽しい企画を行います。

瑞穂保健所との交流事業はリピーターも多く、平成25年9月から26年2月にかけて、65歳以上を対象とした「若返り教室キラキラコース（平成25年度認知症・うつ予防教室）」を支援する形で、５つの企画を行います。

これらは、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部保育学科・生活学科の教員と学生、名古屋女子大学同窓会「春光会」および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。今年度も、より充実した地域貢献を推進・発展させてまいります。

（文責：原田妙子）

講演会のお知らせ

演題 学士力を向上させる実社会連携型PBL
――専門教育と教養教育の視点から――

日時 平成25年9月19日㈭ 10:00～12:00
（はじめの30分は、昨年度、機関研究「大学授業法６」で実施いたしましたアンケート調査についての報告を予定しております）

場所 学校法人越原学園 越原記念館ホール

講師 金田 重郎 氏（同志社大学PBL推進支援センター 副センター長）

総合科学研究所の機関研究「大学授業法6」では「『学士力』育成のための教育方法の検討」をテーマとし、PBL（問題解決型学習・課題解決型学習）、アクティブラーニング等について検討を進めております。

そこで、本年度の講演会では、PBL の先駆的取組を進めておられます同志社大学 PBL 推進支援センターの金田重郎教授をお招きし、先生が実践されております地域社会と連携した専門教育 PBL、及び教養科目 PBL であるプロジェクト科目「絵本ソムリエ・プロジェクト」の経験から、実情と課題について紹介をいただきます。そして、専門教育と教養教育の２つの視点から、PBL 教育導入の成果および課題等について講演いただきます。

略歴

1976年4月・日本電信電話公社・武蔵野電気通信研究所入所。以後、大型電子計算機の研究実用化、ソフトウェア構築法の研究等に従事。1997年4月・同志社大学大学院・総合政策科学研究科・教授。現在、同志社大学大学院・理工学研究科・教授。2010年・実社会連携型 PBL の業績により情報処理学会・教育賞受賞。京都府・京都市の学識委員としても活動中。同志社大学・PBL 推進支援センター・副センター長。プロジェクト科目検討部会幹事。工学博士、技術士（情報処理部門）。

今年度運営委員

委員長 原田 妙子 HARADA Taeko（短期大学部）
伊藤 充子 ITO Mitsuko（文学部）
辻原 命子 TSUJIHARA Nobuko（家政学部）
羽澄 直子 HAZUMI Naoko（文学部）
森屋 裕治 MORIYA Yuji（短期大学部）

研究所メンバー

所長 竹尾 利夫 TAKEO Toshio
顧問 河村 瑞江 KAWAMURA Mizue
主任 渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi
准教授 越原 もゆる KOSHIHARA Moyuru
職員 寺島 まり子 TERASHIMA Mariko

編集後記

ここに総合科学研究所だより第17号をお届けいたします。ご執筆いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。本号では１年間の様々な研究所の事業の概要をお伝えしました。機関研究、プロジェクト研究は確実な成果を生み出し、地域貢献事業は新たな先生方の参加も増え、益々有意義な活動になってきています。今後も、時代に適応する研究所の役割・意義をご理解いただき、ご協力下さいますようにお願いいたします。

文責：渋谷 寿

名古屋女子大学 総合科学研究所だより
平成25年9月1日 17号
発行・編集/名古屋女子大学 総合科学研究所 〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町3-40 TEL052-852-1111㈹
本誌記事、写真の無断転載を禁じます